

～唐津版マッセリア・ディダッティカ～

地域に「食と農」という種をまく

# 「AGRI-LINK事業」

唐津市 福祉総務課

吉田 憲司



1

## もくじ

- |               |           |
|---------------|-----------|
| 1 はじめに        | 6 事業の目的   |
| 2 背景と課題       | 7 事業の内容   |
| 3 国の政策動向      | 8 期待される効果 |
| 4 イタリア視察からの示唆 | 9 行政の役割   |
| 5 唐津の地域資源     | 10 まとめ    |

2

## 0 1 事業の概要 食と農から「地域の関係性」を再構築する



○“食と農”という日常の営みを通じて地域のつながりを再生する施策

○人口減少・農村の高齢化により地域の関係性が弱体化

○イタリアのマッセリア・ディダッティカが示した  
「食と農の中での交流」の構造を唐津に応用

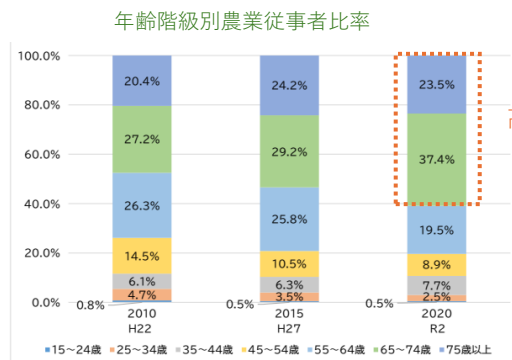
○新たな支援策ではなく、「多世代が自然に交わる場」づくりにより、  
地域の支え合いが生まれる地域の土台をつくり直す

3

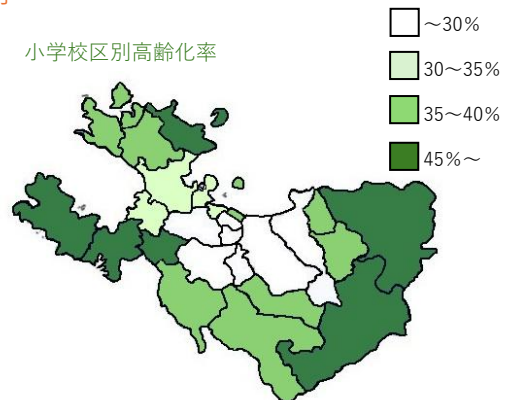
## 0 2 背景と課題—① 農地という地域の基盤が弱体化

○農業の担い手は高齢層に偏りがある

○農地が集中する中山間地域ほど、高齢化が進行



小学校区別高齢化率



○生産基盤であると同時に「地域の協働基盤」である農地の維持が困難

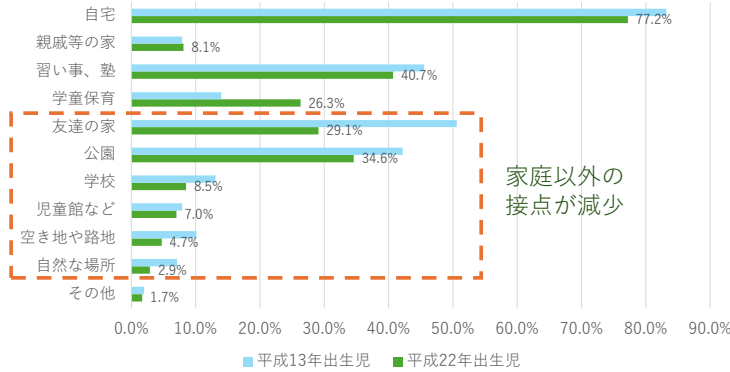
出典：R6唐津市論点データ集

4

## 02 背景と課題—② 子どもが地域と出会わなくなっている

○子どもが地域の大人と接し、学び、育つ機会が減っている

小学生の放課後の過ごし方



こどもの居場所が家庭内や教育機関に集約



○大人と自然に出会う機会の減少により、**日常の学びや地域の知恵**の継承が滞る

出典：厚労省：第9回21世紀出生児縦断調査

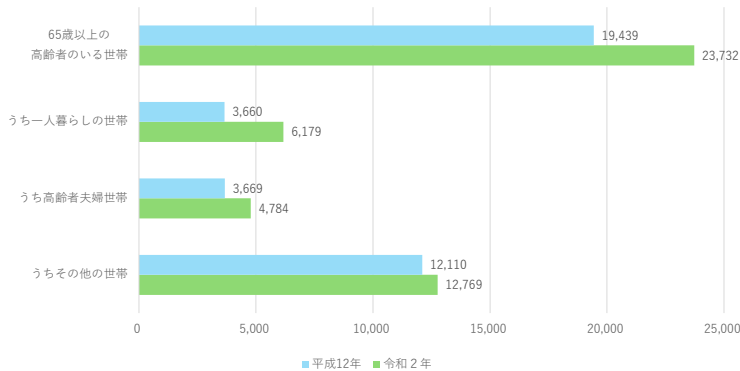
5

## 02 背景と課題—③ 高齢者も地域との接点が減少

○家族構造の変化や地域コミュニティが縮小

○高齢者の生活は家庭内で完結しやすくなっている

高齢者世帯の推移



○日常の中で誰かと関わる機会が減り、変化や困りごとが見えにくくなっている

出典：唐津市地域福祉計画・R2国勢調査

6

### 03 国の政策動向～地域住民の関係性の再生を重視

○厚生労働省も「**地域共生社会の実現**」を進める

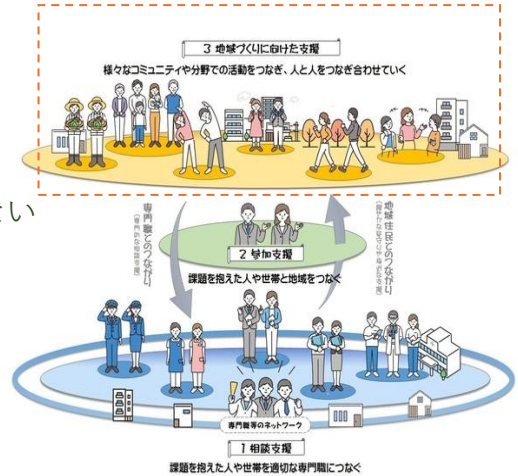
○地域の支え合う力自体が弱体化



しかし、既存の支援では地域課題に対応できない

○重層的支援体制整備事業の柱の一つとして  
「**地域づくり事業**」を位置づける。

地域住民同士がゆるやかに支え合う**基盤**を  
作り直すことを重要視



重層的支援体制のイメージ

7

### 04 研修で得た知見～食育による多世代交流の実例

○プーリア州が進めるマッセリア・ディダッティカの食育活動は農家の所得向上が目的だが、「**食と農を通じて多世代が自然に関わる構造**」が成立していた

○農業→食材→暮らし→文化をストーリーにして農村ガイドが行われていた

○農家のやりがい、こどもの学びの機会、多世代交流の場の創出が起きていた



8

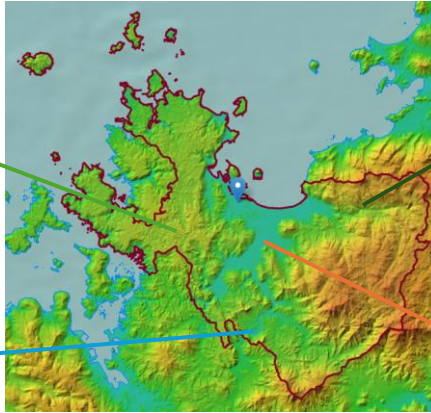
## 05 唐津への示唆～唐津にも子どもたちへ伝える資源はある

○唐津の地域資源も、マッセリア・ディダッティカの農村ガイドで見たようなストーリーを生む力を持っている

ミネラル豊富な  
赤土の農地



豊かな生態系を  
維持する水源



海、河川、台地、山間部など多様な地形があり、それぞれの地域を特徴づけている

清流の食材を  
使った郷土料理



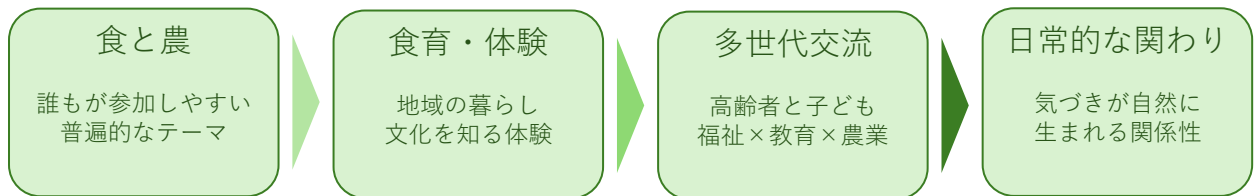
有機・減農薬で  
栽培された野菜



9

## 06 事業の目的～多世代が自然に交わる場づくり

○食・農は世代を問わず誰でも参加できる普遍的なテーマ  
⇒多世代交流と日常的な関わりを再生させる入口



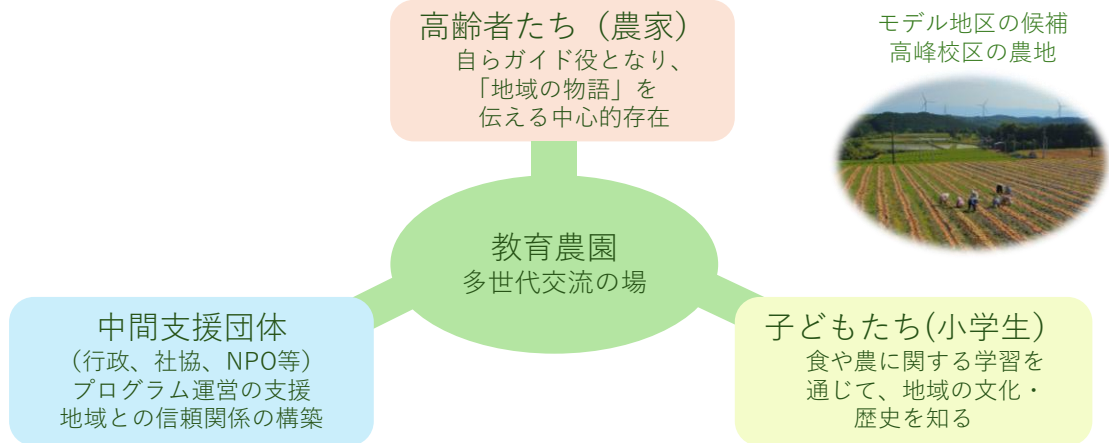
○唐津版マッセリア・ディダッティカを行うことで

- ・高齢者に地域の知恵を伝える教育の担い手になってもらう
- ・地域で人と人が自然に関わり合い、互いを気にかける関係性を再生する

10

## 07 事業の内容—① 教育農園を形成

○高齢者が営む農地を活用し、「地域の物語を伝える教育農園」をモデル的に実施



○高齢者は支援の対象ではなく、地域の物語を語り、知恵と文化を伝える担い手に

11

## 07 事業の内容—② 食と農の体験プログラム

○単発のイベントではなく、年間を通じて育てる、収穫する、食べる、伝えるという一連の営みを経験できるプログラムを設計する



○時間をかけて関わることで、地域の中に「顔の見える関係」を育てる

12



## 07 事業の内容—③ 高齢者を「地域を伝える担い手」に

高齢者が感じる不安

- ・教えられるか分からない
- ・なにを話せばいいか分からない



農村ガイドの言葉

「自分の土地を見つめれば  
伝えるべきことは自然に生まれる」

まずは伝えたい地域資源を考える場を作る

### STEP 1 地域を見つめる

地区社協の活動の場で  
「子どもたちに伝えたい」  
地域資源を出し合う機会を作る

- 高齢者＋行政・社協  
子どもたちに伝えたい地域のこと・農業のこと・農家の暮らしぶりを出し合う  
行政も参加しネタ出し支援

### STEP 2 伝え方を学ぶ

外部人材を招き、地域資源を  
面白く楽しく、伝える・感じて  
もらう形にする

- 高齢者＋行政・社協  
伝えるストーリー・体験の  
作り方を一緒に学び、整える  
体験プログラムの内容を考える

### STEP 3 教育農園で実践

食育を実践する場を設定し、  
子どもたちに伝える

- 高齢者  
教育農園で子どもと関わる
- 行政・社協  
実施する教育農園の選定  
学校との調整  
実践後の検証

## 08 事業の効果—① 社会的効果

○役割を持って関わる場が生まれることで、世代を超えた顔の見える関係が蓄積される

高齢者が役割を持つ → 多世代の顔の見える関係 → 自然な見守り・孤立予防

自然な見守り  
つながりの再生

支援制度によらない  
高齢農家の孤立予防  
多世代間の相互理解

高齢者の役割・  
いきがいの創出

支援の対象ではなく、  
経験・地域の知恵を  
伝える立場になる

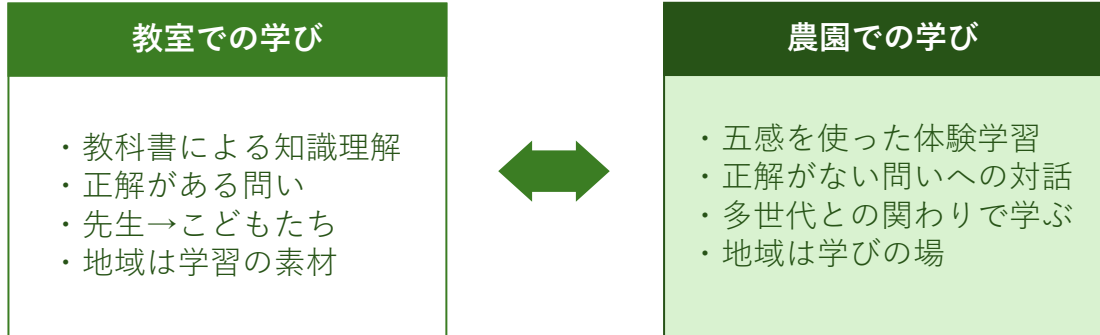
地域資源の発掘

食と農の体験プログラムで  
地域の営みを「見える化」

## 08 事業の効果—② 教育的効果

○食や農を通じた体験により

- ・教室で学んだ知識が実感した理解に
- ・地域のアイデンティティ（＝テリトリー）への愛着が育まれる
- ・高齢者と子どもの“世代間の学び”が成立



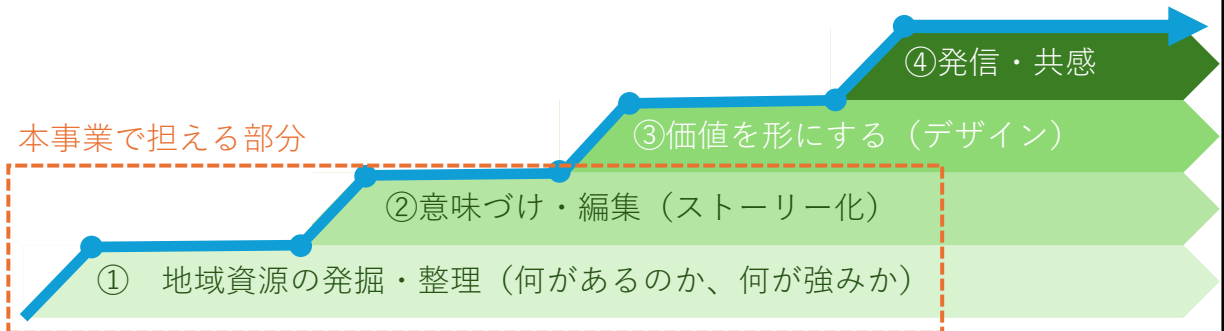
15

## 08 事業の効果—③ 経済的效果

○ブランディングは地域資源への深い理解と物語を土台にして生まれる



食と農の体験プログラムを通じて地域資源が整理され“物語を持つ価値”となる



○その積み重ねが、製品の付加価値向上、地産地消の強化、農業×観光へとつながる

16



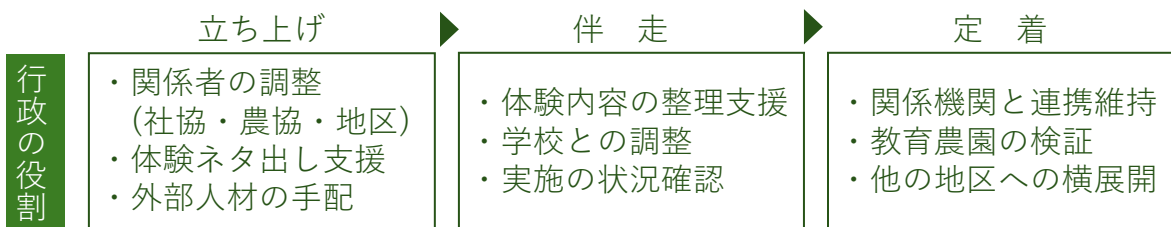
## 09 行政の役割 立ち上げを支え、地域主体へつなぐ

行政は立ち上げ期には必要な調整と、ストーリーを作成する場づくりを担い、立ち上げ後は地域主体の取り組みが自走できるよう後方支援を行う



○KPIの候補

- ・教育農園に関わった高齢者の人数
- ・体験プログラムの実施回数



17

## 10 「AGRI-LINK事業」 まとめ

○本事業は、「多世代が自然に関わる地域の土台」を再生する施策

○AGRI-LINK = agriculture（農）を起点に多世代をつなぐ  
食と農という種をまき、関係が育つ時間を大切にする

○高齢者が食育を行うことで、多世代の参加・交流・見守りが循環

○地域福祉×農業×教育が横断的に連携

○地域共生社会の理念を実現し唐津らしい地域づくりモデルの創出

18